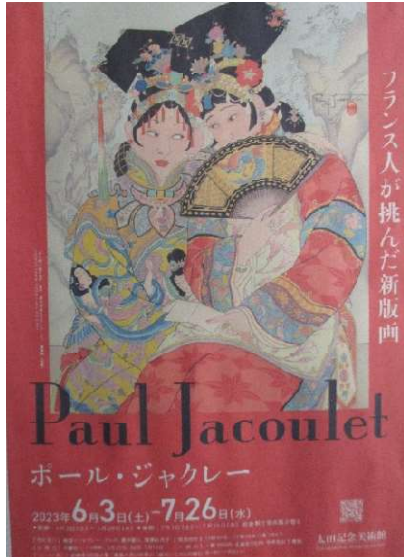


フランス人が挑んだ新版画 ポール・ジャクレ

太田記念美術館(神宮前) 前期 23.06.03~06.28 後期 07.01~07.26



フランス・パリ生まれの「ポール・ジャクレ」(1896~1960)は、3歳時に来日し64歳で亡くなるまで日本で暮らした版画家で、10代前半で日本画を学び、30代にはサイパン島やヤップ島などのミクロネシア島々に頻りに訪れて、島民たちの姿を水彩画で描いた。その後、摺師や彫師の協力を得て、南洋、日本、朝鮮、中国といったアジアの人々を描いた「木版画」を刊行している。

昭和前期は、絵師、彫師、摺師の共同作業によって、新たな芸術表現を目指し「新版画」が盛んとなった時期であったが、様々な国の老若男女が暮らす鮮やかな色彩で描いた「ジャクレ」の作品は、数ある新版画の中で“唯一無二の存在感”を放っている。

本展は、「ポール・ジャクレ」が手がけた「新版画全162点」(前・後期で全点展示入替え)を首都圏では初めて紹介し、江戸の浮世絵を愛した「ジャクレ」が昭和の時代に挑んだ「新しい木版画」の世界を楽しむことができる。

ポール・ジャクレ《打ち明話の相手》連作 「満州宮廷の王女たち」より
解説は「ポール・ジャクレ全木版画集」(20年刊232頁)に詳細がある。
ポール・ジャクレの代表的な木版画作品



1. 「貝を持つファララップの女」(後期)
2. 「オロール島の少年、東カロリン」(前期)
3. 「太平洋の神秘、南洋」(前期)
4. 「北風、韓国」(後期)
5. 「清馨(きよか)さん」(前期)
6. 「真珠、満州」(前期)
7. 「オウム貝、ヤップ島」(後期)